

論文の内容の要旨

論文題目 竹田における農村景観の近代の変容と多層的共同体の関係性
(Relationships between Agricultural Landscape Changes caused by
Modern Works and Multi-layered Communities in Taketa City)

氏 名 山 田 裕 貴

本研究は農村景観を農業土木施設や空間（モノ）、農業・暮らし（コト）、多層的共同体（ヒト）の三者の関係が作り出すものであると考え、基礎的方法論を人文学・地理学的立場に置きながら、共同体という人間の営みの単位に着目して、景観が生成し変容するメカニズムの解明・記述を試み、農業土木施設や農事の近代化にしたがって共同体のあり方に生じた変化である再組織化を実証的に論考したものである。

多層的共同体とは、哲学者の内山節が提唱した共同体理論で、地域特に農村における共同体とは単独的ではなく多層的に共同体を形成しているものであり、様々な共同体に所属する個人は其中でおりあいを付けて生きているというものである。私たちを取り巻く世界は、近代化されたもので覆い尽くされており、近代化の中で共同体は解体され、個人にまで細分化されていくのだが、農村特に稲作を行っている様な所では、河川からの取水や用水路管理などの、共同財や共同作業が発生するため、必ずしも多層的共同体が解体されてはならず、多層的共同体は近代の変容を受容しながらも解体ではなく再組織化されたと指摘できる。また本研究では、アレグサンダーが提唱したセミラティス構造とツリー構造を採用し、多層的共同体をセミラティス構造とし、近代化とはセミラティス構造からツリー構造への移行であると解釈している。

景観研究において共同体に着目する意義は、近年に制定された文化的景観の概念が明確にした。文化的景観の最大の特徴はそれまでの「表出された」景観（モノ）の保全ではなく、その景観を「表出する」営為・活動を保全しようとしたところにある。営為・活動そのものを保全しようとするれば、必ずその営為活動を行っている人間あるいは共同体（ヒト）に目を向けざるを得なくなる。棚田のような人間の営為活動によって作り出されている景観は、文化的景観の最たるものの一つである。

本研究で対象とする大分県竹田市は、昭和63（1988）年時の調査において急傾斜地域（勾

配1/6以上)の棚田を有する市町村において全国一の耕作面積を誇っている地域である。近世以来、井路と呼ばれる用水路が多様に発達し、稲作が継続的に行われてきた。ただし、竹田においても近代化の波は押し寄せており、近代農業土木技術や農業機械の導入、土地改良区などの法人組織の誕生、ほ場整備などの近代の変容が多岐に行われているが、急峻な地形によって水源が制限されている竹田においては、共同体が色濃く残っていると考えられる。

本研究は、①竹田における井路と共同体の存在を網羅的に把握し、②近代の変容を整理した上で、③モノやコトが近代化を受容していく中で、どのように多層的共同体(ヒト)が再組織化されていったか、④またモノ・ヒト・コトの因果関係を探り、⑤その多層性が何によって保たれたかを考察する事を目的とする。

研究方法としては、史実を明らかにする面で二次資料を主に用いる。しかし、小規模な井路や、小さな範囲の歴史は資料としても残っていない場合が多いため本研究では、井路関係者や農家の方々へのヒアリングと現地踏査を行っている。

本論文は大きく6章に分れており、第1章では背景目的を述べ、既往研究を参照し、本研究の独自性を明らかにし、本論文の構成を述べる。第2章では、竹田について稲作に関わる気候や水系、稲作の歴史について整理し概説する。第3章では、竹田の井路について、それを維持管理している共同体のあり方や井路そのものの特徴分析し、井路の特徴と共同体の存在とあり方を網羅的に把握する。第4章では、竹田において稲作に関わる近代化の過程を整理する。ここでは、第3章で明らかにした井路に関して、農業土木施設や空間(モノ)、共同体(ヒト)、農事や暮らし(コト)に分けてその近代化を整理し、近代化における重要な変化点であった明治期～昭和初期、戦後期、昭和後期についてその特徴を述べる。第5章では、具体的な3地区(羽恵/岩瀬/巢原)について、近代化の過程を子細に明らかにした上で、近代の変容の中で多層的共同体がどのように再組織化されたか、モノ・ヒト・コトの相互関係を考察している。第6章では、何が変わらなかったか、多層的共同体が何によって保たれたかを考察している。本研究では以下の事が明らかとなった。

- ① 竹田市には現在 101 の井路が存在しており、その共同体のあり方は土地改良区、水利組合、地縁的共同体の 3 種類に大別できる。またそれら井路と共同体のプロットした井路マップを作成し、流路が特定できる土地改良区の井路を分析する事で井路に関する近世的/近代の特徴を明らかにした。(3章)
- ② モノについては、ダム、水路、頭首工、ほ場整備(田の集約)に分け、ヒトについては稲作の共同体と井路の共同体に二分して近代的組織の成立とその特徴を、コトについては機械化の歴史を参照しながら、それぞれ竹田における近代化の過程を整理した。また物理的な景観の変容においてはほ場整備が重要な変化点である事を示し、共同体に関しては、一様に近

代化を果たしていない事を指摘した。(4章、付属年表)

②' 羽恵、岩瀬、巢原の3地区に関する近代化の過程を現地踏査、ヒアリング、二次資料を基に明らかにした。(5章)

③ 最も大きな物理的景観の変容であるほ場整備の際に、給水系統と田の個人所有がどのように再組織化されたかを分析し、羽恵地区ではセミラティス構造からツリー構造へ移行するが、岩瀬地区と巢原地区においては、給水系統はツリー構造になるのに対して、田の個人所有は共同所有の形態を取るため、セミラティス構造化していく事が明らかになった。

多層的の共同体に関しては、当初よりツリー構造を示していた羽恵地区はその構造を崩さないが、近年新たな共同体が誕生する事でセミラティス構造化している。岩瀬地区はセミラティス構造を弱めるものの、その構造を維持する。巢原地区はセミラティス構造を大きく崩すが、近年における新たな共同体の誕生によってセミラティス構造へ再組織化していく事がわかり、いずれの地域もその多層性を再組織化させながらも、多層的の共同体が保たれている事を明らかにした。(5章)

④ 多層的の共同体(ヒト)を中心とし、モノ・ヒト・コトの因果関係を見て行くと、外的要因としては、農業(コト)の近代化によって、巢原地区に見られた夜なべ小屋などの地域独自の共同体は消滅する。また農業土木施設(モノ)の近代化はそれぞれの共同体がもつ意味合いを弱めさせるが、共同体の多層性を消滅させるには至らない。なお、巢原地区に見られるように、井路が統合されると多層的の共同体のセミラティス構造は一気に崩れる事を明らかにした。

内的要因としては、人口減少により共同体の維持が困難になると、共同体は統合され多層性を失う。また農協のように共同体自体の合併によって、多層的の共同体のセミラティス構造を壊すには至らないが、共同体のスケールを二極化させていく。また、このようにセミラティス構造を崩して行く一方で、平成以降に新たな共同体が誕生する事によってセミラティス構造に再組織化していく事が明らかとなった。(5章)

⑤ 多層的の共同体は3地区において保たれたが、羽恵地区と巢原地区でセミラティス構造へ再組織化したのは、集落への関心や機械の共同利用を主目的とした新たな共同体の誕生であり、岩瀬地区においては旧河道によって出来た右岸と左岸の意味合いが色濃く残り井路が統合されなかった事が起因している。つまり、物理的(外来的)な要因ではなく、意味的(内在的)な要因が多層的の共同体の拠り所となっている事を考察した。(6章)